

世界の最先端アートが名古屋へ

3年に1度の国際芸術祭「あいちトリエンナーレ」の第2回展が8月10日から79日間、名古屋の2つの美術館とまちなか、そして岡崎市内で開催されます。現代美術のほかに、パフォーマンスアーツやオペラなどもあり、世界の先端に行くアートの今を体験できます。

私は、第1回の「あいちトリエンナーレ2010」で長者町企画コンペの審査員をしていました。作品を鑑賞する人が日を追って増えたのが印象的でした。愛知芸術文化センターでは、作品が空間の持っているポテンシャルを引き出しているのを目の当たりにしました。それから、まちなかが展示場になることで、ふだん入ることのできない建物空間を体験できたことも個人的にはおもしろかったですね。

記憶には物語や表現が伴い 人の心を揺さぶる力がある

「あいちトリエンナーレ2013」のテーマは「揺れる大地—われわれはどこに立っているのか：場所、記憶、そして復活」です。今回は、テーマ性の強さが特徴です。3.11の大震災は、アートの世界にも試練を与えました。原発事故を含む想像を超える事態は、わたしたちがこれまで当たり前と思っていたことの根拠を突き崩し、社会の枠組みやアイデンティティを揺さぶっています。

日本の場合、震災が直接的な契機になりましたが、海外にもそれぞれ問題があり、グローバルズムの中でアイデンティティが揺らぐような現実があります。現代アートは、社会との関係が強く、現実と向き合い考え表現する芸術です。そうした揺らぎの中で、われわれがどこに立っているのか確認しようというのが、今回のトリエンナーレのメインテーマです。

3・11以降のアイデンティティの 揺らぎの中で、われわれは今、 どこに立っているかをアートで表現



あいちトリエンナーレ 2013

芸術監督

五十嵐太郎 さん

いがらし たらう / 1967年パリ生まれ。東京大学大学院修士課程修了。博士(工学)。中部大学講師等を経て現在、東北大学大学院工学研究科教授(都市・建築学)。2008年ヴェネツィア・ビエンナーレ国際建築展の日本館コミッショナー。あいちトリエンナーレ2010の長者町企画コンペ選考委員。



あいちトリエンナーレに参加する台湾「打開連合設計事務所」の作品《長者町ブループリント》2013
伏見地下街と地下鉄伏見駅連絡通路出入口
photo: 怡土鉄夫

サブテーマに「場所、記憶、そして復活」とありますが、私が特に興味を持っているのは記憶です。例えば地震や津波は反復します。でも人の記憶は薄らいでいく。そういうとき、アートこそがそれを伝える記憶装置として機能するのではないかと。ラスコーやアルタミラの洞窟絵画は、人類がまだ言語すら持っていない何万年も前の世界を伝えてくれる。しかも単なる記録と違って、記憶には物語や表現が伴い人の心を揺さぶる力があります。世界のアーティストが記憶にどう向き合い、どう表現するか、楽しみにしています。

名古屋のまちの可能性を 建築の視点から再発見してほしい

都市とアートには、きわめて刺激的な関係があります。アートに導かれ、ふだん見過ごしていた空間を再認識したり、新しい意味を見いだしたりします。逆に都市には背負っている固有の歴史があり、その場所独自の雰囲気があります。それがアーティストにインスピレーションを与えます。

名古屋の都市としての特徴は、都市計画の歴史と建物とのつながりが強いことですね。今回、トリエンナーレに合わせて建築のガイドブックを刊行します。愛知県には価値ある建物が少なくないし、世界的な建築家の設計した作品もあります。トリエンナーレに参加する建築家が実際に設計した住宅など、ふだん公開されない建物を見られるイベントもやります。この機会に、名古屋のまちの魅力や可能性を建築の視点から再発見してほしいですね。